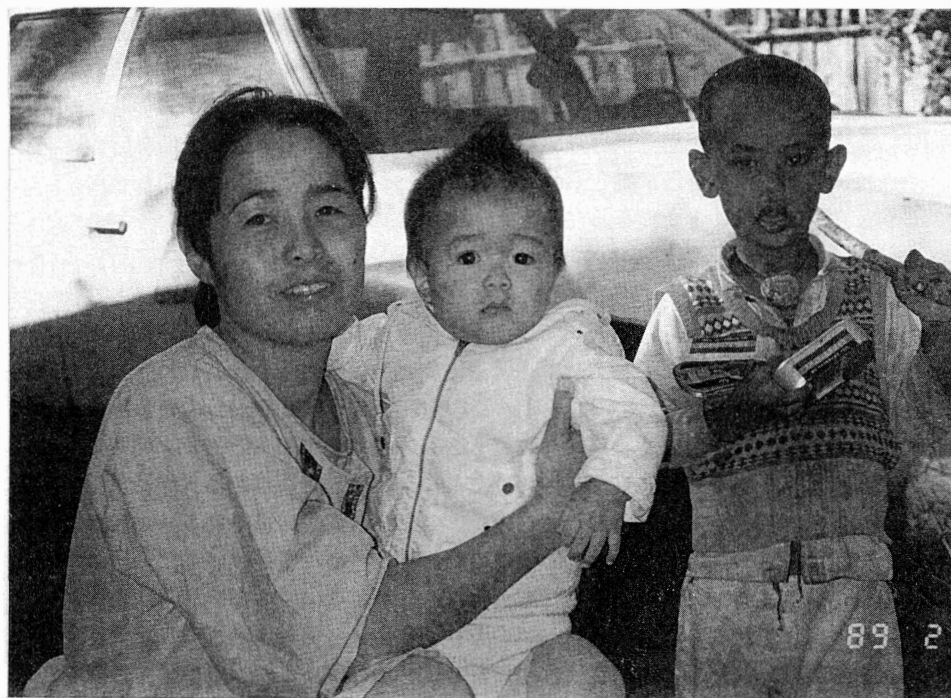


Trial & Error トライアル・アンド・エラー No.108

試 行 錯 誤



大喜(ひろき)くんはエチオピア育ち

特集 異文化で暮らす — 子育てを通して見る世界

エチオピア 突然の熱に大あわて	3
ボリビア 子供たちと暮らしたボリビア	4
タイ 難民キャンプで子育て	6
ジンバブエ 僕がNGOに参加するわけ	8
日本 カンボジア人のパパとママと彼と	10
外国で暮らしてみたら	11
〔投稿〕 アジアからの花嫁を訪ねて	14
緊急 バゲダッド報告	16
JVCにゆうす	18

心豊かな子供に

まもなく子供が生まれて来る。初めての子だ。名前も決めた。ベッドや産着も用意した。さて、どっちが生まれるか。別にどっちでもいいが、やはり母子ともに無事に出産を済ませて欲しいというのは、父親になる者の切なる願いである。

乳児死亡率の高い第三世界と関わっている者にとって、自分の子供を持つことは、問題がより身近に感じられ、子育てという共通の話題を通してもっと深く彼らと関わるができるだろう。

カンボジア難民のキャンプで働いていたころ、彼らからよく「日本に行きたいが何とかならないか」と聞かれた。なぜか、と問い返すと「子供に日本の教育を受けさせたいからだ」という答えが圧倒的に多い。かたわらをはだかで元気に走り回る子供たちの彼方に、正月返上で勉強に取り組むねじりはちまきの日本の子供たちの姿が目に見えた。この無邪気な子供たちが日本の御都合主義的な管理教育の渦に巻き込まれて行く姿を想像するとぞっとした。何が日本の子供たちをあそこまで競争にかきたてるのか。一流と呼ばれる大学を出て、一流と呼ばれる企業に勤めるためなのか。いや、企業や、省庁に入った後も彼らの競争は続く。あれはいったい何なのか。昇りつめたそこにいったい何があるのか。名誉のためか、高給を得て、物質的な満足感に浸るためか。残念ながら僕にはいまだにそれがわからない。それよりも昇ってゆく過程で失って行くもの、時間、友だち、喜怒哀楽は後で取り返せるのか、また連中の競争のために理由もなく犠牲になっている第三世界の人々の暮らしはどうなるのか。心配しだすときりがない。

確かに彼ら（カンボジア人）の目から見ると、次々と最新の技術を生み出す日本は魅力的で、それが高度な教育課程によるものだと誤解することがわからないわけではない。しかし、僕は思う。子供のうちからおとな社会の価値観にあてはめ、何の根拠もなくみんなと同じ道を歩ませて、安心することほど愚かなことはない。裸の王様を笑い飛ばせるような生き方ができないだろうか。

おそらく、これからも何度か第三世界の現場に赴任することになるであろう。その際には必ず子供も連れて行く。そしてその国々の子供社会の中に入り、いろんな価値観のもつれ合う中で自分を発見し、彼ないし、彼女なりの生き方を模索して行ってほしいと思う。その結果、たとえ日雇い人夫になろうとも、また大学教授になろうとも、真実を見つめ広い視野で物事を考え、その一方で家族やまわりにいる人たちにも思いやりのある心豊かな人間になってくれればと、欲張りなことを考えたりする今日この頃である。(T. S)

突然の熱に大あわて

鈴木直喜

息子とアラミツさん一家

我が家の長男大喜（ひろき）は生後3カ月でエチオピアに行きました。私たちのエチオピアでの新居は事務所の一室。仕事をしていると奥の部屋から泣き声が聞こえてきます。普段は妻の美佐子がいるので気にしませんが、その日は大喜を寝かしつけてミーティングに出かけて留守。困ったと思いながら壁一つ隔てた我が家に戻ると、まだ眠いらしく不機嫌で泣いています。眠ければ勝手に眠ればいいのに困ったものだと思えば抱きあげても、おっぱいが欲しいのか、はたまた単身赴任してきた小生の慣れない抱き方がわかるのか、泣きやまる気配なし。腹が立ってきて「美佐子はいつ帰ってくるんだ、畜生!」と思いながら抱くものだからますます泣き声は大きくなるばかり。ついに、見かねてアラミツさんが登場。子育てのベテランのアラミツさんに頼ることになります。アラミツさんは4人の子供がいる“事務所の母”。2人はすでに親元を離れて生活していますが、残る2人の子供、ムラニ（6歳）とアラマーヨ（3歳）を抱え、徴兵され、戦場へ出かけたお父さんの帰りを待っているたくましいお母さんです。

アラミツさんに抱かれた大喜はあっという間に寝息を立てています。どうも我が家で一番エチオピアの生活に溶け込んだのは大喜のようです。慣れない仕事におわれて友だちを作ったりするゆとりのない小生の傍らで、大喜はムラニとアラマーヨとが遊んでいるのを見ては楽しそうにゲラゲラ大笑い。小さいながら一生懸命自分もついていこうとします。日々役人と喧嘩ばかりしている私にとっては、これだけ生活をエンジョイできる彼らが羨ましい限りです。国際人になってほしいというのは、自由な子供から社会の制約に縛られた大人へのメッセージかもしれません。

戒厳令の夜に

エチオピアでは夜12時から朝5時まで戒厳令があり、外に出られません。30年近く北部チグレ、エリトリアの解放戦線とエチオピア政府との間で紛争が続いているためです。この5時間の間に武器を積んだ軍用トラック、兵隊を乗せたバスが人知れず戦場

へ向かうようですが、私たち一般人には何が行われているのか良く分かりません。ところでこの戒厳令、ドロボーさんにとっては命取り、さすがの彼らでさえも出勤できず開店休業です。そんなわけで生活は規則正しくなり、夜の町を徘徊しても12時まで。子供がいれば夜の町に出ることも少なくなり、夕食後はテレビがあるわけではなく、東京から届いたT/Eを片手にさっさと布団入り。9時ともなればラーメン、寿司、餃子、魚の塩焼が夢の中でオンパレードとなります。

そんな日々の生活に刺激を与えるのが子供の病気です。生後半年を過ぎて母体からの免疫が切れてきた大喜は早速病気になり、高熱が数日続いて苦しう。夜中になってますます熱が上がり日本製の薬に不信感が出てきた小生、明日は病院に連れて行こうと思っていたら、寝ずに看病している美佐子が、大きな声で呼び出した。「大喜がおかしい。どうしよう、どうしよう。早くお医者さんに連絡して」大喜は息が止まり、目が上がり、意識無し。エチオピアには戒厳令があるが119番はなし、脳裏に色々なことが浮かんで来ました。戒厳令の下町を赤ん坊を連れてうろろしたところで整った病院があるわけではなく、不審なものと思われて銃を突きつけられるのがおち。美佐子が看護婦で集中治療室で随分働いたことがあったはずだと気付いたのは、結局数十秒後、大喜がもとどおりに回復した後です。

その後、数日で病気も直り、突発性発疹で高熱から来るけいれんだったと分かったのですが、自分の子供のことになるかと看護婦だったことを忘れる人、死と隣合わせの人たちに対し活動しているはずなのに、いざそれが自分の問題となると、環境の手ごわさにお手上げになってしまう人がいたことがはっきりします。エチオピアの環境は時として傍観者になっている私たちを当事者として迎え入れてくれます。こんな経験を通す事により、今まで仕事の対象と見がちだった、病院に集まるエチオピア人親子が少し近く感じるのです。子供は私たちに、地域に根ざした生活を教えてくださいました。帰国するとき、アラミツさんたちは大喜に「いつ帰って来るの」と涙ぐんで聞きました。

子供たちと暮らしたボリビア

仲佐 保 仲佐直子

三人の子供たち

「BUENOS DIAS」と、娘、かおいに声をかけても返事はせず、「スペイン語は嫌いな」といって、ほとんど日本語で過ごした3年間。それがボリビアから日本へ帰って2カ月がたったこのころ、「大きくなったら、壇君（長男）と南君（次男）と、サンタクルスに行くの」といっている。子供は子供なりに何かをこの3年間で感じ、頑張ってきたのであろう。

私たち夫婦は、1981年タイのカンボジア国境のカオイゲン難民キャンプで知り合い、それにちなみ、長女、長男の名を「かおい」「壇（だん）」とつけた。1985年、長女かおいがお腹の中にいたときは、僕自身はエチオピア緊急医療に参加していて、帰国後2週間後に彼女は生まれた。そして、翌々年、1987年1月から3月にボリビア出張中に、国際電話で妻が長男壇を身ごもったのを知った。1989年8月には、次男が生まれ、南米ボリビアにちなみ、「南」と名付けた。かおいがJVCオフィスで臨時のベビーベッド（段ボール）に寝ていたのが懐かしい。

ボリビアへ

かおい2歳、壇2カ月の1987年12月にボリビア出張することとなった。当然家族とともに長期に海外へ出るのは初めてであり、周囲の人は随分心配してくれたが、私たち自身は将来もずっとこのような外国での仕事をするつもりであり、初めての場所としてはちょうど良いところとは思っていた。と言うのは、ボリビアのサンタクルスは気候的には亜熱帯で確かに暑いけれど、朝晩は涼しくて過ごしやすく、また、日本食（米、味噌、日本野菜）を日本からの移住者が作っているため、手にはいることなどからである。かおいは特に米が好きで、食事の苦労が無いのは生活の上で非常に良かったと思っている。

成田からサンタクルスまでの長い飛行時間にもかかわらず、かおい、壇ともよく眠ってくれ、無事現地に到着した。真冬の日本から真夏の地へ。その日ざしの強さにはびっくりさせられた。子供たちもびっくりした事であらう。

日本から11時間も時差がある南米の地理的中心ボリビアに3年間も住んでいながら、家の中では食から始まって全く日本と変わらない生活をしていたので、当然ながら子育ても異文化の中だからといって特別なことをしたわけではない。ただ、日本にいるときと違ってメイドが掃除、洗濯はするし、庭の掃除は庭師がするので、子供たちにとってはどう感じたか分からないが、メイドが来ない日曜日なんか、忙しく掃除、洗濯をしていると、かおいは「今日はママがするの？」とよく聞いていた。ボリビア人のお金持ちの家のように、子守やメイドに子育ても日常的なこともすべておまかせという風には、日本へ帰ってからのギャップを考えると、日本人としてはとてもできなかった。

私たちの子育てのモットーは、伸び伸びと健康であって欲しいということが第一の条件なので、日本の狭い家と違って走り回れる家と緑と花が豊かな幼稚園の運動場ぐらいの庭があり、そこで飛んで回っている子供たちを見るのは嬉しいものだった。また、庭には毎日いろいろな小鳥が飛んで来て、近くで見ることができたこと、夏になると蟬の抜け殻が庭に落ちていて子供たちが眼を輝かせて探していたこと、暑いのに庭の砂場でいつまでも遊んでいたこと、季節ごとに庭にあるバナナ、マンゴ、パパイヤ等を自らの手に取って食べたことなど、私たちが小さいころ、田舎で経験したことをこちらで経験させられて良かったと思う。まだ小さいので忘れるかも知れないが、心の片隅に何らかの形で残るのではと思う。

スペイン語、三人三様

言葉のギャップは私たちもそうだが、特にかおいにとっては大きかったようだ。サンタクルスに着いた頃はまだ2歳で二語文がやっと出来る程度だったので、家の中では日本語をきちんと教えるつもりでいたし、遊ぶ友だちも日本人だったので問題はなかった。しかし3歳で現地の幼稚園に入ってから、スペイン語に対しての違和感が出たようで、今までの生活では大人がスペイン語を話しても自分に関係無いと思っていたのが直接自分に関係があると感じた



ときから、登園拒否、喘息の発作などを起こすようになった。結局約2年間幼稚園に行っていたが、ほとんどスペイン語は喋らなかったようだった。このことがストレスなのか、ちょうど反抗期とかさなって何に対しても反抗的で、自分の子育てに対しても不安を抱いたこともあったが、事あるごとに反応せずに、人間が人間として生活するというのは場所が変わっても同じであると考えたら、こちらも子供に対しての接し方が楽になったような気がした。

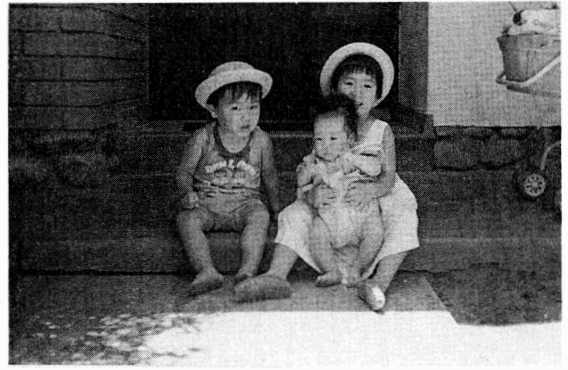
長男、壇の場合は性格もおっとりしているせいか、2歳の言葉も喋るか喋らないかの時に、かおいと同じ幼稚園に入っても何の違和感も無かったようで、少ない単語ながら、スペイン語で話し、ボリビア人の友だちとも遊んでいたし、家では日本語を話し、それが違う言葉とは気が付いてないように上手に使い分けていた。同じように育てていても、もって生まれた素質があるのか、子育てというのはおもしろいような、恐いような感じがした。

次男、南は、ボリビア生まれ。日本からの助人の助けにより自宅分娩し、現在1歳6カ月になる。三番目となるとこちらにも余裕が出て、余り手をかけないためか、かえって自分で遊びまわり人見知りもしない。日本とボリビアの二重国籍を持っているせいかなとも思ったりする。

上の二人は、弟が出来た事によって少しはお兄ちゃん、お姉ちゃんらしくなったようである。

おにぎりを作りながら南米旅行

また、いろいろと楽しい思い出も多い。3年間の途中、家族で南米の旅行をしたことだ。最初は1988年、チリ、アルゼンチン旅行。チリのサンチアゴについた夜、かおいが熱性けいれんをおこす。親（医師、看護婦）の集中治療により軽快、次の場所のイグアスの滝に向かう。いろいろな所へ行くたびに二人の子供は寝てしまい、重い荷物と二人を抱え、大



移動。行く先々で米を買い、ふりかけでおにぎりを作って子供に食べさせる珍旅行であった。1990年のアルゼンチン、ブラジル旅行はさらに子供が一人増えての残酷旅行。三人眠ったら、かおいを起こして歩かせる。子供たちもたくましくなっていくのである。

最後に、幼稚園の修了式だ。かおいはボリビアのコチャバンバという地方のインディオの服装で踊りをし、壇はアメリカインディアンを真似て上半身裸で踊った。ずいぶん楽しい思い出したのである。

子供たちに望むこと

現在、かおい5歳、壇3歳、南1歳と三人とも日本へ帰国以来、いたって元気である。かおいても幼稚園に入園し、日本語の中、生き生きと生活している。しかしながら、これから海外出張（長期）には是非三人を連れて行きたい。実際、子供たちにとっては必ずしも心地のよい生活ではないと思うし、果たしてそれがよいのかどうかは分からない。教育のことも問題になるかも知れない。しかし、子供たちにはこんな親を持ったとして、諦めて貰わなくてはならない。子供たちは結局、親から自立して行くものであり、親を他人としてみるようになるのであろう。外国であろうと国内であろうと、子供たちには親がこの様な仕事を好きで一生懸命やっているんだという姿を見せて行きたい。途中、彼らは、彼らなりに勉強の問題、言葉の問題、就職の問題等で悩むこともあるだろうし、日本の国内の多くの人々と自分は違う環境で育てられたと思うであろうが、少数派としての誇りを持ち、人生を歩いて行って欲しいと思う。そして、広い視野を持った国際人に育てて欲しいと思う。

最後に本年1991年9月に第四番目の子供（出来たら次女）が出生予定であり、皆さんに名前を考えて頂きたい。募集中。

タイ

難民キャンプで子育て

井本美奈

みんながごあいさつ、「チャ・エー」

平成2年7月12日0時20分

バンコクの病院にて円（まどか）誕生。

身長49cm，体重2960kg，親孝行サイズ。

ガタン。チリン，チリン，チリン。さっそうと門のレールを越えて，今日も新聞配達のおじさんがやって来た。色あせた狭いつばの麦わら帽子をちょっと斜めにかぶって，黒いレンズのサングラスをかけての登場だ。朝7時15分ごろにタイ語の新聞，昼過ぎに英字新聞を届けてくれる。今日は円のお昼ご飯の前に来て，軒先にゴザを敷いて遊んでいる円に，「チャ・エー」と一言笑いかけて行ってしまった。

夕方になって円と屋台に夕飯を買いに行く。注文した料理が出来上がるのを待っている間，同じように待っている近くのお兄さんに「チャッ・エー」と声をかけられる。あやしてもらって円は上気嫌。さて，帰るかと思いきや，途中酒屋のおばちゃんに「まどか」と呼び止められ，10日年上のおばちゃんの家の男の子と握手する。上気嫌の円におばちゃんは「チャ・エー」を連発する。

7.5キログラムを片腕に抱き続け，そろそろ疲れたので，再び家に向かって歩き出す。家まであと100メートルというところで，道行く小学生の女の子2人につかまる。にこっと笑って「チャ・エー」「チャ・エー」と円に話しかけてくる。小さな脇に抱きかえられた円は，女の子の髪の毛を引っばって遊び出す。道を車やバイクが通るたびに，ピンポン玉を追うように左に右にバタバタと動かれて，女の子は円を支えきれなくなってしまった。

ふたたび腕に戻ってきた円と家についたのは，出かけてから1時間後であった。片道徒歩で5分ぐらいの買い物コースだ。円を片手に外に出歩くようになってから，実に多くの人たちに話しかけられる。

日本語の「こんにちは」にあたる「サワディーカー」より，赤ん坊のあやし言葉である「チャ・エー」と声をかけられる方が，だんぜん多い。また日本で赤ん坊を連れて過ごしたことがないので比較できないが，少なくとも自分の住んでいるこのタイの田舎町や，カオイダン難民キャンプでは，男女，年

令を問わず，赤ん坊にとっても気軽に接していると思う。こと日本においては，男性が自分から他人の子を抱いたり，あやしたりしている場に出くわすことはあまりないだろう。

男の人も育児の先輩

平均的なサラリーマン家庭では，子供の世話は接する時間の一番ある母親に任せられるのが一般的だ。ところが，難民キャンプでは違う状況ができています。父親が電車やマイカーで通勤することとまるで縁のないこの社会では，いみじくもある訪問者が感想をもらしていたとおり，キャンプの幼い子供たちは「つねに家族とともにいる」ことが出来る。だから，父親の子育てにかかわる割合が，日本の一般家庭とは比較にならないぐらい多いと思う。もちろん，なかには母親任せの父親もいるだろうが，多くの男性が赤ん坊を慣れた手つきで扱うのには感心してしまう。

円が3カ月になってから一緒にキャンプに行くようになった。キャンプに行くと，男の人が寝床のハンモックを吊るしてくれたり，水浴び用の水を汲んでくれたり，洗ったおしめを干す場所を作ってくれたり，実によく気がきく。手際の良さでは見習うべき点が多く，子育ての先輩である。

“郷に入れば郷に従え”というように，円もキャンプでは裸ん坊だ。キャンプは，30キロメートルも離れたアランの町よりも，なぜかいつも暑いのだ。赤ん坊がおしめをつけない，洋服を着ないというのは，物が無いからというよりも，着ない方が気持ちがいいからだとい我が子を見ていて思う。たとえ自分の服でウンチをされても，着たまま洗って2時間もすれば乾いてしまう。紙オムツ使用反対運動などとはまったく無縁の世界だ。今は，家でもなるべくおしめをつけない時間を作っている。

赤ん坊は月が満ちれば自然に生まれる

キャンプの人々の生活を通して子育てについて学ぶことが多いのだが，それは妊娠中にもいえた。私は初めての出産を，身内のいない（夫以外の）異国で迎えることに不安や心細さを感じていた。でも，キャンプの女性たちを見ていると，お腹の子は外へ

出る用意が出来たら自然に出るのであって、出産という行為を大げさに考えることなどないのだと思えた。結婚している女性に子供がいるのは当然のようなキャンプにいと、出産は落ち着いて待っていればいいのだという気になった。また、タイでの出産は、バンコクの病院を利用する限りにおいて、医師の対応や設備などは日本と全く変わらない。定期検診も、日本で聞いていたのと全く同じ間隔で行われた。

核家族が平均像になっている日本社会では、初めての出産にともなう母親学級、セミナー、助産婦の直接指導など、いたれりつくせりのサービスが提供されている。妊婦は自分の親からのアドバイスの代わりに、情報の波が押し寄せる。試行錯誤の余裕がなく、先に先にと知識を与えられる環境に慣れてし

まうと、その環境の外に出た時に生じる不安感は大い。

外に出て、はじめて自分はこんなにも情報に埋もれ、その虚像の中に安心感を求めていたことに気づかされた。自分が日本で出産を迎えていたら、おそらくこの田舎町にいる時ほど腰（腹？）を据えて出産を待っていられなかったのではないだろうか。

赤ん坊とつきあい始めて、まだ5カ月しかたっていない。これから子供の成長とともに、日常生活の中でも、仕事においても、いろいろなことが起こってくるだろう。どんな時でも柔軟性を持ってその場に合った対応が出来ることが、日本の外での暮らしには不可欠である。また、そうすることによって、考えにも幅ができ、日本を出る前とは違った立場で物事が見られるようになるだろう。

円はキャンプの人気者



親父になったボランティア

井本勝幸

「あんたのごた一男に、なんかできるとねー!!」、海援隊の歌ではないけれど、今、あのことのおふくろの声がよく思い出される。家族を嫌って、故郷をとび出した自分が、9年経った今、その家族を持っている。甲斐性のない男が親父になってしまったと、はずかしながら自分でもそう思っている。僧侶をしている叔父につけても

もらった名前、円（まどか）、お風呂の時、ミルクを飲む時、すべてを、この腕にあずけている円、置き去りにされたと間違えたのか、べそをかく円。いつも裸ん坊の円。南の国タイで、たくさんの外国人にあやされては笑いあやされては泣き、決して立派だとは言えない親父は、いつも「心の広い人になれよな」と元気一杯の円に話し

かけている。

次の世代の人々に、自分は何が出来るのか？

次の世代の人々に、自分は何が残せるのか？

子供にすべてを教えてもらおう、そんなボランティアが親父になった。



僕がNGOに参加するわけ

篠田正志

NGOはトレンドーだと、僕は思っている。日本ではもちろん流行にのっているわけではないけれど、地球社会全体からみれば、現在、そして将来の新しい時代にあった活動だから。第三世界の国々で人々と接し、違った文化に触れ、視野を広げ、誰をも平等な「人間」としてよりよく理解しようとするとき、自分自身のことも、もっとよく見えてくるんじゃないかな。第三世界で必要なのはポンプ、こちら側に必要なのは広い視野と大きな心というように。

異なる文化を持った人と一緒に行動するのは、難しいことが多い。でもみんな同じ地球市民なんだ。その架け橋となるのがNGOの役目だと思う。そのところが僕のジンバブエに対する思いにつながっている。

僕を陽気に迎えてくれ、育ててくれたジンバブエに、いつか恩返しをしたいと思っている。NGOの活動を通して恩返しのようなことができればと思う。

誰でもすぐ仲間になれる国

7年前、僕はアフリカ南部の内陸国で、緑の豊かな美しい国ジンバブエから、こまごまとした日本に帰ってきた。ジンバブエがイギリスから独立した1980年から3年間、6歳から9歳までの成長期を、ジンバブエで過ごした。

思い出といえばさまざまあるが、一番の思い出は何と言ってもジンバブエの人々のことだ。子供たちの輪があれば、誰でも自然に入ることができ、勝手に抜け出せる。誰もが普通に仲間に入れてくれた。また、夕方になると小さなラジオを囲んで歌ったり、踊ったりしていた。小さなラジオを原っぱの木の枝にぶら下げ、サッカーをしたりして楽しんでいた。その中には医者もいれば、住み込みの庭師もいる。子供もいる。ほとんどは黒人だけれども、白人が来ようが、日本人が来ようが特別扱いなどはない。普通に仲間にしてくれる。僕はそれを当り前のことと思い、意識したこともなかった……………日本に帰ってくるまでは。

学校でも同じだ。僕が通っていた学校は公立の小学校、中学校が一緒になっている学校だった。僕は小学校のことしか分らないが、1学年に5～6ク

ラスあり、1クラスに40～50人の生徒がいた。黒人もいれば、白人もいる。貧乏な子もいれば、裕福な子もいる。でも、生徒の間では肌の色や家庭など関係はなく、遊ぶときは遊び、けんかをするときはけんかをした。黒人だけ、白人だけでかたまることはなかった。僕が入学したときも、特別な扱いは受けなかった。友だちも、友だちの親も、外国人としてではなく、ただの友だち、自分の子どもと同じクラスの子として接していた。

ジンバブエのことを話し始めるときがなくなってしまう。ジンバブエの人たちはいつも陽気で明るかった。音楽のセンスも抜群で、おしゃれも上手だ。そして、ジンバブエに誇りを持っていた。特に偉いとかいうのではなく、心からいい国だとみんな思っていた。独立直後で、みんな苦しいし、お金もあるわけじゃない。でも生きていることを楽しむ方法を知っていた。

環境も、またよかった。遊び場がいっぱいある。狭いところでも遊べるように考え、みんなで作り出していく。だから物事をおおらかに考え、そんな風に行動するから、社会全体がゆったりと進んでいく。これこそが素晴らしいジンバブエの文化、ジンバブエの個性だと僕は思う。

僕がこうしたジンバブエの素晴らしさに気が付かされたのは、日本に帰ってきてからだった。

ほかの国のことをもっと知ってほしい

僕が素晴らしいと感じるジンバブエのことを、文化的に程度が低い、遅れている、と見る人が僕のまわりに大勢いる。本心で。

アフリカを誤解している人がずいぶん多いことにも気が付いた。アフリカはみんな一緒、飢えていて、文化水準が低く、汚い。そこから帰ってきたおまえも同じ、と言われたこともある。黒人は黒いから嫌い、と言った人もいた。僕はその度にむきになってジンバブエのことを説明した。でも結局は空しくなり、そうした人をただ黙って軽蔑するようになった。

学校でも帰国子女だからいじめられた。ジンバブエでの人との接し方とは全然違った。意味もなくいじめ。僕にとっては信じられないことだった。

そういう見方、そういう行動こそ程度が低い、というのは極端かも知れない。これは個人の問題ではなく、日本社会の問題、社会の根元から解決していなくてはならない問題だと、最近感じている。日本人全員がそうだと決して思わないが、他の文化、他の国の人々への認識の仕方がおかしい人が多いのだと思う。それはきっと、異なる文化に接するときの心のゆとりや、視野の広さによって変わってくるはずだ。

お互いに公平な目でものを見ようと努力し、理解を深め、お互いを尊重し合いながら協力していくの

が本物の海外協力であり、その役割を果たしているのがNGOだと、僕は信じている。日本が本物の国際社会の一員になるためには、その活動が絶対に必要であるし、その活動が、例えばジンバブエに対する日本社会の偏った感覚を和らげてくれることになると思う。NGO活動が僕とジンバブエをつなぐ架け橋ともなっていく——3年間NGO活動にかかわって、こんな風に思い始めている。

素直な気持ちを教えてくれたジンバブエ、お互いの理解をもとに海外協力活動を行っているNGO、その中で自分のできることを少しずつやってゆき、ジンバブエへの僕の恩返しにするつもりだ。

この本は、外国人労働者、いわゆる「じゃばゆきくん、じゃばゆきさん」とまさに家族ぐるみでつき合ってきた兄弟の交遊記録である。そこには、本当は自分たちの生活の糧を作り出そうとやってきたのに、この日本社会において私たち日本人の生活に潤いを与えるのみで、大損し、苦境に立たされる彼らの悲哀がありありと描き出されている。

昨今、議論されて久しい「外国人労働者問題」とは、著者(弟・秀隆氏)のことばを借りれば「外国人労働者が日本にやってくることによって生じる日本人にとっての問題か、もしくは外国人労働者を一くくりにしての全体的な問題であり、それぞれ独特な顔をもつ、彼ら一人ひとりにとっての問題ではさらさらない」という。つまり、彼らが母国でどのような生活を営んでいたか、日本がどのような国として彼らの目に映っていたのか、そして実際の日本で抱いた生活感情とはどのようなものなのかを、彼らと先活を分かち合いながら知ることなしには問題の本質は見えてこないのである。

兄・之保氏が妻子共々フィリピンやタイからやってきた彼らの友人としてつき合う中で、彼らと日本社会との葛藤をリアルに描き出すのに対して、弟・秀隆氏は放送局の報道記者としての行動力とセンスを生かしつつ、フィリピンやタイに強制退去になった彼らを訪ね、「彼ら側の論理」を浮き彫りにしている。この兄と弟の絶妙な掛け合いに

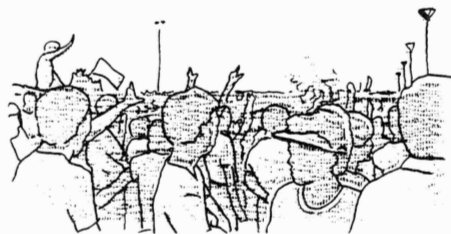
—book—

につぽん

異人漂流記 P M C 出版

鎌田之保、鎌田英隆著

じゃばゆきくんとつきあつて



よって構成されている各章からは、とても生き生きとした人間くさい生活そのものが匂ってくるようだ。

異文化圏からやってきた彼らと顔を突き合わせながら、ある時は日本人の価値観、またある時は彼らの価値で物事を考えるセンスを身につけていくことの中にしか、この「豊かさボケ」日本人の意識に影響を与えていく方法はないのかも知れない。

制度・政策を変更したり、にわか交流会・勉強会を開催したりするのもいいが、生活者としての彼らと本音でつき合うことの大切さを、著者は伝えてくれる。その意味でこの本は「外国人との付き合い方実践入門」と言っても過言ではないだろう。(小野)

カンボジア人のパパとママと彼と

小野豪大

君は何人？

彼はいま5歳。遊び盛りでやんちゃな男の子だ。目がクリクリしていて、昔懐かしいNHKの子ども向け人形劇の人形にそっくりで、かわいらしい。もう知り合って2年以上たつけれど、本当に子どもの成長は早い。私にはさっぱりわからないことをどんどん吸収していく。といっても中身はテレビマンガやおもちゃのことばかりなので、それを私がよく知っていたらその方がスゴイと思う。

彼のパパとママはカンボジア人。1983年に別々に来日した。その翌年、めでたく結婚。彼はその2年後に生まれた。

カンボジアで生まれたカンボジア人、タイの難民キャンプで生まれたカンボジア人、アメリカで生まれたカンボジア人、フランスで生まれたカンボジア人、そして日本で生まれたカンボジア人……。人種としてはみんなカンボジア人だが、彼の中身はどう見ても日本人の子どものもそれとなんら変わらない。実際、パパとママは彼を日本語で育てている。試しに彼の家を訪ねた時に「君は自分のこと何人だと思う？カンボジア人だと思う、それとも日本人だと思う？」と質問してみた。しかし彼はそんな問いもまったく気に止めずに、ただちゅるちゅると牛乳を飲みながら「ちびまる子ちゃん」に夢中になっていた。

一般に〇〇人というのは何を基準にいうのだろうか？人種、国籍、宗教、住んでいる国、影響を受けた文化……。私たちはかなり曖昧な使い方をしていると思う。彼が私のことを「外見はカンボジア人だが中身は日本人だ」といったが、それも厳密な意味ではないし、そんなふうに定義付けていいものなのかわからない。「人を定義付けるなんて何の意味があるの？それはそもそも偏見の始まりなんだ」と彼の陰の声が聞こえてきそうだ。

アメリカがいいか、日本がいいか

そんな彼は先日、パパとママといっしょに2週間ほど、アメリカの親戚のところへ行ってきた。顔かたちはパパやママと似ているけれど、日本語がぜんぜんできない人たちは、その代わりにカンボジア語と英語を話していた。パパとママはカンボジア語があるので問題ないが、日本語だけしか話せない彼は

最初とても緊張した。しかしそのうち子ども同士でキャッキヤ、キャッキヤと遊び始めた。私たち大人は、ことばが通じないとコミュニケーションが成立しないかのように思いがちだが、子どもたちのコミュニケーションはそんなものではない。もっとストレートでダイナミックでアクティブだから、ことばがなくてもそれなりにうまくやれるのだ。

彼のパパの話では、親戚の子どもたちはアメリカでバイリンガル教育を受けていて、小さいうちから二重言語生活の中で「カンボジア系アメリカ人」としての民族性が養われるそうだ。パパはちょっと羨ましそうだった。日本に定住したマイノリティーの母(国)語を学ぶ権利を公的に保障するには、いったい何十年かかるだろうか。日本で生まれて5年の彼がカンボジア語でお母さんにおねだりしていたら、やっぱりカワイイではないか。

一方、彼のママは「(子どもを育てる環境として)アメリカと日本のどっちがいいかなんて、たった2週間じゃわからないですね」というていた。そしてママはことばにつまるたびにこういった。「子どもはどこでもみんな同じですね」。私は、最初その意味がよくわからなかったのだが、いま考えてみると半分わかる気がする。

どんな文化圏でも、どんな制度のもとでも、親がしっかりしていれば子どもは自然にスクスク育っていく。アメリカがいいとか、フランスがいいとか、日本がいいとか、そんな基準で子育てをしているのではない。大切なのは親の愛情なのだ……。彼のママの、国や文化を越えた子どもの見方にあらためて感動する一方で、まだ子どもを持ったことのない私にはやはり半分しか理解できない。

それにしても、またいつか彼に「君は自分のこと何人だと思う？」と質問してみたい。それはやはり愚問で、彼がだんまりを決め込んでも構わない。しかしその時「牛乳とちびまる子ちゃん」ではなく、もし「ココナツジュースとカンボジア語吹替えの香港映画」に夢中だったら……。ドラマみたいであり得ないシーンだが、そんなおもしろい子どもが育ってもいいと思う。また、「地球人！」なんて答えもイキでいいけど、それは少々期待しすぎか。

外国で暮らしてみたら

諸石 和生

ツウルネッシュ マコーネン

カルチャーショック

K：君に「異文化との出会い」について書いてもらいたいって言われたんだけど。

T：異文化ってなに？

K：日本のことだろう、君にとっては。日本に来て何か感じたことがあるだろう。そんなことじゃない？

T：あなた、エチオピアで何を感じたの？

K：急に言われても出てこないよ。もう忘れちゃった。

T：私も、何も出てこないわ。

K：そんなことはないだろう。君は、いま、日本で生活しているんだから。

T：何も出てこないのよ。もちろん何かを感じているけど、それが異文化なの？私は別に日本を感じているわけじゃないわ。子供の世話とか、あなたの世話で、何かをしみじみ感じている暇なんてないわ。

K：そういえば、僕が「異文化」って呼べるようなものを感じたことがあるとしたら、エチオピアで生活してたときよりも、むしろ4年ぶりに日本に帰ってきたときだな。

T：やっぱり日本は先進国だとか。

K：いや、もっと生理的なものだな。エチオピアに行った時は、ただ生活の場所が移ったくらいにしか考えてなかったから、カルチャ

ーショックとか異文化には無頓着だったな。

T：どこでも同じよ。ただ生活があるだけ。違った場所には、違った人たちがいて、違った生活があって、違った食べ物があって、そんなの当たり前じゃない。

K：まあ聞けよ。俺も当たり前だと思っていたのさ。当たり前である以上、異文化なんてものは感じないし、自分自身も変わらないつもりでいたのさ。

T：でも、日本に帰ってみたら変わっていたというわけ？エチオピアでつきあっていたときと同じよ。変わってなんかいないわ。

K：日本に帰ってきて、また当り前の生活が当たり前になると思っていたのさ。でも、違っていたね。自分でも驚いたんだけど、30年も生活していた国に戻ってきたなんて信じられなかったよ。

T：4年間、エチオピアの食べ物を食べて、エチオピア人の顔に囲まれて生活してきたんだから、環境が変わって、面食らったんじゃないの。

K：初めてエチオピアに行ったときにはそんなことなかったんだよ。突然環境が変わっても。あのときの感じとは違うんだ。まあ、以前当然と思っていたことが、当然でなくなったってとこかな。

T：なに言ってるのかよくわからないわ。

K：例えばさ、エチオピアでは仲のいい連中は、男同士でも、女同士でも、手をつないで歩くじゃない。俺もよく手をつないで歩いたよ。別に何も意識しないで。それが、日本に帰ってきたばかりの頃、やっぱり友だちと歩いていて手をつないでしまうんだ。気持ち悪いって言われて初めて気付くんだ。そんなときなんだよな。異文化、というより文化を感じるの。日本に帰ってきてから、文化について考えるようになったみたいだな。意識的に、と言うより、なにか生理的な欲求から。

T：ふーん。なんかわかるような気がする。



迷惑な挨拶

T：私ね、日本人が嫌いじゃないし、いい人がたくさんいると思うけど、ひとつ嫌なことがあるの。

K：ひとつだけなの？もっとたくさんあって構わないよ。

T：それはね、質問されること。どこから来たのか、とか、何しに来たのか、それから一番嫌なのは、日本のことをどう思う、なんて類の質問ね。

K：なんだ、そんなことか。そんなこと外国人の宿命みたいなもんじゃない。

T：嫌なものは嫌なのよ。なんて答えたらいいかかわからないし、面倒だし。

K：適当に答えておけばいいのに。

T：適当に答えているのよ。でもね、最初につまづいちゃうの。エチオピアってどこにあるの、って必ず聞かれるのよ。日本語がよくできないし、説明難しいでしょ。だから、アメリカとかフィリピンとか答えちゃうの。そうすると、アメリカには行ったことがある、アメリカのどこの州かなんて、かえて面倒なことになっちゃう。

K：ばかだな。

T：最後は、私、日本語よく分かりません。すみません。………そしたら、英語でしゃべる人もいるわ。英語は知らないから、エチオピア語でまくしたててやるけど。

K：苦勞しているんだね。確かに、外国人であるというのは面倒なことだね。でも、相手は悪気があるわけじゃないんだよね。ただ挨拶のつもりなんだよ。

T：そう。親切なのよ。ありがたいとも思うのよ。でも、その人にとっては一度きりでも、私にとっては年中、毎日よ。人に会うごとに聞かれるといらいらしてくるのよ。だってそうでしょう。子供のこととか、生活のこととか、料理のこととか、イラクの戦争のこととか、もっといろいろと話題ってあるでしょう。

K：そんな話題、初対面の人と話すわけじゃない。

T：そうかしら。私、もう長く日本で生活しているから、そんな質問されるとがっかりくるの。間がぬけちゃうというか、とても突飛な質問に感じられるの。無理矢理、外国人であるというところに引き戻される感じね。

K：そういえば、エチオピアの餓鬼どもに、外人、外人と呼ばれるの、初めはなんともなかったのに月日を経るにつれて勘にさわるよ

うになったのと似てるな。でも考えてみるとエチオピアでは、何しに來ているのかとか、エチオピアのことをどう思うかとか、聞かれなかったような気がするな。

T：職務質問みたいでしょ。去年行ったネパールやインドネシアでだって、そんな質問されなかったんじゃない。

K：そうだな。なかったな。でもアフリカとは事情が違うよ。顔かたちが同じだもの。インドネシアでは、俺に道を尋ねる奴もいたよ。気が楽だったね。街をぶらぶら歩いていても視線を浴びることもないし、特別扱いもなければ、差別もない。もっともそこに腰を据えて生活をするとなると別かも知れないけど、この前は外国人であることを意識しなくてもよかった。



外国人の証明書

K：でも、よく「職務質問」なんて言葉を知ってたね。

T：テレビよ。「住所不定、無職」っていう言葉も一緒に憶えたわ。よくニュースで言ってるでしょう。

K：ああ、犯罪者の代名詞みたいだからな。それにしても、「職務質問」っていうやつ、まったく腹が立つよな。俺も何度か経験があるんだけど、決まって職さがしをしているときとか、友だちの家に居候しているときとか、答えがない時なんだよ。連中、ああいうの

を嗅ぎ分けるのに、本当に鼻が利いているんだよな。まったく犬みたいだよ。

T：連中って、警察のこと？エチオピアでも、警察のこと「犬」って呼ぶのよ。

K：ああ、職場の連中がよく使ってたな。職場にも犬がいるから気を付けろって。エチオピアは相当な警察国家だったね。

T：日本もそうでしょう。

K：そうでもないだろう。少なくともエチオピアほどではないよ。住所と職業さえちゃんと答えられれば、味方のようなものさ。

T：もうだいぶ前になるけど、私の住民票がないって言ってたわね。

K：ああ、市役所に取りに行ったから、俺と子供の名前しか載ってなかった。どうしてだって尋ねたら、「外国人は住民票がありません」だって。

T：私、あなたの妻でしょう。子供の母親よ。一緒に住んでるのよ。

K：住民票のかわりになるものはないかって聞いたら、「外国人登録証があるでしょう」って言われたよ。

T：私が病気で入院したときのことね。保険から、私の入院費を支払うには、住民票か何か、私があるあなたの妻であることを証明する書類が必要だと言われたのよね。

K：そうだったね。外国人登録証を見せたら、妻であることの証明なんてどこにも書かれてなかったな。

T：そうでしょう。結局、あんなもの、何の役にも立たなかったじゃない。指紋まで押してあるのに。あれは外国人を守ってくれるものじゃないわ。犯罪予備軍のリストみたいなものよ。それに比べて、あなたがエチオピア政府からもらっていた身分証明書は、役に立つ



ていたでしょう。

K：まあね。あれはどちらかという
と、外国人優遇のニュアンスが
あったかな。一種の特権だったみ
たいだな。

T：あのエチオピア政府でもそう
なのよ。

K：いや、違うさ。あの独裁政府
だからこそだよ。おれは、あの政
府側で働いていたんだから。もっ
ともあの身分証明書も、餓鬼たち
の、「外人」ばやしには効果がなか
ったけどね。

T：違うのよ。私が言っているの
は制度の話。日本の制度って、外
国人に対しては、犯罪者扱いよ。
街を歩けば、毎度の職務質問。

K：警察に職務質問されてるのか。

T：警察なら外国人登録証を見せ
れば済むからいいわよ。そうじゃ
なくて普通の人から。

K：あの質問か。あれは親切のつ
もりの挨拶だって言ってるだろう。

T：わかるけど、もっといろんな
話題があるはずだって言ってるの。

日本人は田舎者

K：村八分と言えば、東京は大都
会って言われるけど、あれは都市
とは呼べないね。でっかい村にす
ぎないよ。

T：この福岡だって。国際都市な
んて宣伝したり、やたら国際化っ
て言ってるけど。

K：それは、僕より君の方が詳し

いんじゃない。君が感じた通りの
街だろう。外国人には教師の資格
も与えないらしいよ。

T：「国際化」って言葉の意味、
よくわかんないな。でも、外国人
が住みやすくなるということでは
なさそうね。

K：僕にもよくわからないけど、
海外からの研修生とか、留学生と
かをけっこう受け入れているんじ
ゃない。

T：それで、留学生に対して奨学
金があるとか、何か具体的な制度



はあるのかしら。

K：知らない。

T：大事なことよ。そういう制度
を伴わないと意味がないじゃない。
誰でも公平に利用できる制度が。

K：えらく制度にこだわるね。

T：国際化と言うなら、まず制度
の上で日本人と外国人の差別をな
くすべきだと思わない？例外がた
くさんあるようじゃ制度とは言え
ないわ。

K：エチオピアだって同じだぜ。
ホテル代なんてエチオピア人の5
倍も払わされていたんだから。

T：気分良かった？

K：ああ、すごく良かったよ。俺
なんてそんな高価なホテル代を払
えるわけないから、テントの中で
熱さにのびてたよ。一緒に出張に
出たエチオピア人の連中は、設備
の整った部屋で、冷たいビールを
飲んでたんだぜ。金儲けに行った

わけでもないのに、そんなのって
あると思う？

T：同じ場所で生活する人には、
全員に公平であるべきよね。国籍
や、性別、肌の色で適用が違うな
んて制度じゃないわ。

K：インドにはカースト制度って
ものがあるけど…………。

T：インド人は田舎者なのよ。エ
チオピアではインド人は田舎者な
のよ。エチオピアでは、地方から
若い人たちが首都に集まって来る
でしょう。都市の魅力って制度的
な公平さじゃないかしら。

K：じゃあ日本人も田舎者か。日
本人は特権が好きなのだし。南
アフリカで名誉白人なんて言われ
て喜んでいるんだから。

T：あなたが言ったんじゃない。
東京は巨大な村だって。差別を必
要とする人間は、みんな田舎者よ。

K：厳しいな。

T：国際都市なんて言うから期待
しているのに、ピントはずれなこ
とばかりするからよ。福岡は。国
際交流するのが国際化じゃないわ。
田舎者根性から抜け出すことよ。

K：交流することで「国際人」に
なろうと努力してるんじゃない。

T：農協の人たちが、旗もって海
外旅行するのと同じよ。

K：よく知ってるな。

T：テレビがあるからね。テレビ
を見てると、日本政府って福岡よ
りもっと田舎者ね。あなた齒が
ゆくくないの。

K：イラクの戦争のことですか。

T：私ね、日本に来るまでは日本
ってすごい文明国だと思ってい
たの。テレビ、ビデオ、自動車、エ
チオピアにあるものはみんな日本製
でしょう。でもまるで子供だわ。ア
メリカの尻にくっついてまわる子供。

K：田舎者から、今度は子供扱い
か。まいったね。

(イラスト 安村 妙)

〔投稿〕

アジアからの花嫁を訪ねて

JVC会員 川俣芳衛

10月10日、JVCの星野昌子さんから電話と書信があり。「10月17日に婦人之友社で『アジアの花嫁さんを考える』というセミナーがあって、アジアから日本の農村にお嫁に来られた方の討論があるので、その実情を知らせてほしい」との御依頼である。

私も農村に生まれ、住んでおり、彼女たちの良き理解者であると自負しながら、実際は「見ざる、聞かざる、言わざる」の三猿主義を決めこんでいたことを最近反省しつつあるので、二つ返事で受けした。(村においても仲間同士のうわさ話程度話題にはなっていない、公然と語ることは避けられていた)

10月12日、さっそく近隣五カ村の村役場に電話をしたが、個人のプライバシーに関わることなので一切お断りとのつれない返事。やむなく友人親戚を通して、ようやく目的の5組のカップルを訪問できることになった。

初めての雪にびっくり

突然訪問することは内心おっかなびっくりで、相手にされないのではないかと危惧していたが、「友あり、遠方より来たる ― とともに語ろう」という心からの歓迎ぶりだった。前もってJVCの活動を掲載した記事などを送っておいたのが良かったらしい。

スリランカやフィリピン中部の娘さんがこちらに来た時は見渡す限り雪で、特に豪雪地帯の会津に近い山村の積もりに積もった雪を見た時は、クリスマスのサンタの雪ゾリの世界に迷いこんだようだったと述べている。

しかし、日本では俗に「縁は異なるもの味なもの」と言うように、結婚して2カ月目ぐらいになると、夫婦の愛情も芽ばえてきて、今まで頻繁にフィリピンの実家にかけていた国際電話(1カ月4～5万の通話料になった)も少なくなったそうで、夫も御両親もほっと胸をなでおろしておられた。

私が訪問した5組のうち3組に赤ちゃんが生まれ現在は8キロほど先の工場に勤務している。近所の主婦たちといっしょに送迎のマイクロバスに乗ったり、夫の運転する車で出勤している。給料は勤務当初は一般の人より2割ほど低かったが、今はだいた

い同じだという。

一組の夫婦は、赤ちゃんが生まれてまだ5カ月目で手が離せないで、もう2カ月したら工場に勤めに出るという。そうになると赤ちゃんは夫が面倒をみることになるのだが、38歳になる御主人は「川俣さん、昨夜妻から『是非近いうちに、第三世界からお嫁さんを迎えた夫婦の会を作って下さい』と頼まれましたね」「妻に川俣さんという方が調査に来ると言ったんです。朝日新聞に載ったJVCの記事のことも話したら、妻は『その関係の人なら良い人に違いなからぜひお願いして』と言うのです」と話しておられた。そして私は二つ返事で、三月ごろまでに夫婦の会を結成すると約束した。

今日本の農村は北海道から沖縄まで嫁不足のため、村が解体の方向に走りつつある。農村の娘たちは都市生活志向型になり、村の生活を見捨てようとしている。娘の母親も農家に嫁がせたくないのである。あまりにも欲望人間中心主義、あまりにも物質偏重主義で、今後大きな問題となろう。日本の農村の娘が農家に嫁ぐことを忌避したその穴埋めに、アジアの女性たちが農村の花嫁として日本に送り出されているのが実情と見るべきであろう。

5人のアジアの花嫁たちは時折訪ね会い、母国語で夜を徹して生き返ったように話をすることもあるという。お嫁さんたちは自分で働いているから適当に実家に送金しているとのこと。月一万程度と見るべきであろう。日本での一万円はたいした価値ではないが、円高の今、嫁さんの母国では3～4カ月分の給料に値する使い出のある金である。夫の話によると、月日の経過によって送金の度合いが減り、赤ちゃんが出来てからは「もうお金は送らないから、私のお金はあてにしないで。来年坊やを連れて里帰りするときお金を持っていくから」と電話をしていたという。アジアの娘さんが日本に嫁ぎ、自分で稼いだお金の一部を送金するということは、大きな視野から見た場合はほえましい国際協力の一光景でもある。

花嫁を迎えて

訪れた三戸の家で、アジアからお嫁さんをもらう



村の人々にごあいさつ(文中とは関係ありません)

© 今枝弘一

ことについて親戚には相談したのか聞いたところ、三軒とも異口同音にこぞって反対だったという。しかし議論をしても、子孫が途絶え家がつぶれるのを待つだけなので、親戚も暗黙のうちにアジアから嫁さんをめとることを了解したという。

スリランカから嫁さんを迎えた老夫婦は次のように語っておられた。「遠い見知らぬところに来て、口に言えない辛いこともあっただろうが、じっとこうして明るく素直に振舞う姿を見ると、自分の本当の娘以上にかわいい」と、親として長男に責任を果たしたことと、孫が生まれ家の存続への安堵感が言葉のはしばしに感じられた。

下田村中浦のフィリピンから花嫁を迎えた家の隣の老夫婦は私とは15年のつきあいであるが、この家に立ち寄ったところ次のように語ってくれた。

「隣りにお嫁さんが来た翌日の朝、お嫁さんとパッチリと視線が会ったんです。にっこりと笑ったらお嫁さんもぎこちない格好でおじぎをしました。その出会いが縁で三日目あたりから30分ぐらい我家に遊びに来るようになったんです。身ぶり手ぶりを交え、言葉がわからないながらもその意味はわかりました。1週間、2週間…2カ月もたつと言葉もしだいにわかってきて、必要に迫られた努力とその進歩にびっくりしたんです。たしか半年を経過したころ、そのお嫁さんは『日本人との結婚を紹介した日本人はウソツキ。雪が降って積もることなんて一言も言わなかった。従業員6人のいる会社の社長で、お金持ちで、立派な家に住んでいるって言っていた。来てみたらみんな約束と違うけれど、主人はやさしい人なので私もここに居る。だからおばさん、おじさんよろしくね』と言うんです」。

その嫁さんもここに来た時はどちらかというやせ型であったが、最近めっきり太ってきたという。今は太り過ぎるといけないから食事を制限しているのだそうだ。本来なら環境の全然違う異国に嫁さんが来ればストレスでやせるのが普通であるが、太るというのはいかにアジアの国々の食生活が貧しいか察せられる。

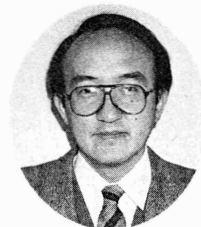
60年前の日本と今のアジア

今から60年前の日本の農村では、一家平均で6～7人家族が多かった。じいさん、ばあさんを加えて10人以上の家族生活もあった。11月、米の収穫による年1回現金収入があるが、その現金も借金返済その他で消え失せ、あとは食いべらしのため子供を奉公に出すか出稼ぎに出るのが実情で、したがって食生活も簡単で一汁二菜程度。それも大部分自分の畑で収穫した野菜でまかなわれ、1週間に1度ぐらいイワシの塩漬にした焼物が小皿につくのがせいぜいだった。主食の米もなるべく多く売って現金を得るため、大根、青菜、雑穀などを3割ぐらい混ぜて自家用の米の消費を節約していたが、さすがに小さい子供たちには混ぜご飯でない純米があてがわれていた気憶がある。当時はしょうゆがあったことはあったが、貴重な調味料で、お祭り、お盆、お正月用の味付けなどに使われる程度で、台所の棚深くしまわれて祖母の管理下にあった。調味料としては塩汁に近い味噌汁で日常がまかなわれていた。

アジアの国々のお嫁さんの実家の食生活もそんな状態に近いことが推察される。彼女たちが総じて明るく解放的でのんびりしているのは、南国の気候風土の表われか、また他の風俗習慣に溶けこみやすいのは、諸民族との交流が盛んだった歴史が作りあげたのかもしれない。

仲介者を通した結婚には300万円前後の現金が必要とされるようだが、見合いのための渡航費を含めると、どうもそれより数字が重んでいると思われる。しかし実際の経費は180万から200万ぐらいで、それ以上の数字は仲介人のフトコロに入るらしい。長野県上田市の仲介者からフィリピン人の娘さんを紹介され、縁組された見附市郊外の安達さんは、「金のかからないガラス張りの結婚紹介所がほしい。そして日本で1～2カ月間、日常の会話、生活習慣の手ほどきをする講習所があったら、どれほど嫁をもらう人も来る花嫁もよほど助かる」と発言していた。

緊急 バグダッド報告



柴田 久史

JVCでは既報のとおり、湾岸戦争の被災民に対し具体的な支援策をとることが決定し、2月27日、柴田久史をイラクに派遣した。当初はイランから陸路で入ることを計画していたが、内務省の許可が取れず結局ヨルダン側から入国することになった。

現在柴田は、JVCとして何ができるかイラクで調査中である。上下水道、発電所など基幹設備が破壊されたうえ、薬品も決定的に足りず、病院はあっても入院患者を受けることができない。以下は柴田から東京に送られた報告である。

3月19日(火)

午後4時ごろ（イラク時間、日本との時差は6時間）、無事、立正佼成会の水谷さん、斉藤さん、東さんとともにバグダッドへ到着した。

アンマンを3月17日の午後に出発。途中お茶を飲んだり、ガソリンを買ったり何度も道草をくって、国境の難民のトランジットセンター、ルワイショットキャンプに夜11時ごろ到着。キャンプのテントで一泊し、19日の朝6時15分にキャンプを出発した。

イラクの国境通過が朝7時40分。「バグダッドまで400 km」という標識を見たのが午前11時。こちらの道はおおむね良い道で、ハイウェイで片道3車線の所もあった。バグダッドから300～400 kmの間でトラックが10台ぐらい爆撃でやられていた。バグダッドから125 kmの地点（道路標識で確認）に大きな橋があり、その橋の片側の一部は爆撃で落とされ、もう片側もかろうじて車一台が通れる状態だった。道中たくさんの兵士がヒッチハイクをしていた。

3月20日(水)

バグダッド市内は一見平穏そうだが。今、イラク赤新月社の病院の病室に泊まっている。午前中は、ガルフピースチームのメンバー（ドイツ人）やドイツ人医師、カナダから個人で来た夫婦など多彩な顔ぶれで、イラク赤新月社の案内で爆撃された所や孤児院（戦災孤児ではない）を見学。ビルの骨組みを残してひどくやられていたビルを2カ所、クリニックセンター、商店の一部などであった。

おおむねアメリカのピンポイント攻撃は正確で、

そうした破壊されたビルに出会わなければ、一見ふつうの町だ。こうした箇所のみをセンセーショナルに写真を撮ると、町全体がやられたような錯覚をする。むしろ町全体はふつうで、爆撃のすごさはよくわからない。バスターミナルには非常にたくさんの兵士がいる。故郷に帰るのだろうか。ガソリンスタンドの前には車が数百メートル並んでいる。電気はない。赤新月社の宿舎は夕方2時間、ジェネレーターで自家発電している

援助団体の動きとしては、MSFの2人の医者が出て病院をひとつ任されているが、医者はイラクには十分いるので彼ら自身は治療をしていない。ほかにセイブ・ザ・チルドレンのチュニジアのスタッフが、イラクで何が必要なかを調査している。

私のバグダッド滞在はビザが切れる5月24日までは可能。以前にこちらでの滞在は1週間ぐらいと言っていたが、役所そのものがほとんど機能してなくて物事がほとんど進まない。つまり1週間では何も見ることができない。できれば3月末までこちらにいたい。

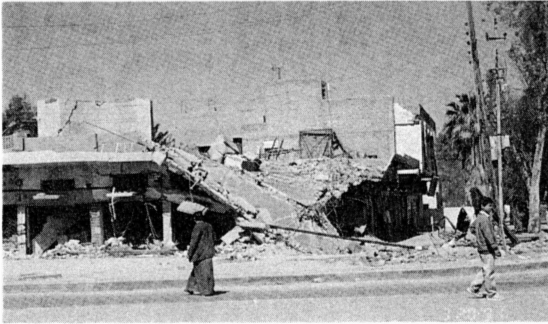
3月22日入手

3月21日(木)

イラクも春分の日で休日。朝9時、ラシッドホテルへ行ってMSFの連中に会おうと思ったが不在で会えず。そのまま町の雑貨屋へ行く。バナナとビスケットを買う。店屋のおやじの言うには、「物価が高くなって、貧しい人は食糧を買えないから助けてやってほしい」とのこと。

午後3時、自分の足で赤新月社の宿舎から1時間ぐらい歩いて町へ出る。今日は休日のせいか道路に立つ警官もほとんどなし。商店街の前を通るが、大きなガラスのショーウィンドーには十字にガムテープが貼ってある。ときどき割れているのも見かける。食堂、コーヒーショップなど食事関係の店は全部閉まっている。戦争の影響というより、ラマダーン（断食）のせいか。開いていたのはカメラ屋、靴屋、洋服屋などぜいたく屋が多い。八百屋、肉屋は開いていた。

あちこちの店で水道の水が出ていた。この辺は町の中心部で、すでに水道は修理されている。見た目



には日本の水道とまったく同じ。にがりもない。藤沢製菓の合併会社（ヨルダン）で働いている薬剤師のおにいちゃんが英語が話せるのでいろいろ聞いたが、水道はスイスの会社が一部資材を提供して、すでにバグダッドの60%の水道は回復しているという。しかし電気はなく、店ではプレッシャーランプ、ケロシンランプを使っていた。マンホールの近くへ行くとドブのにおいが時々する。下水はほとんど働いていないようだ。

とにかく町はいたって平穏。何も知らずに来たら、ついこの間まで戦争があったとはわからないほどだ。

夜、食事（チャーハン、鶏肉の揚げたもの、スープ、トマトに大豆の入った物）をした後、ヨルダン人たち（私のドライバーのナーディさん、英語の話せるパレスチナ人）と宿舎のロビーで歓談。

ドライバーのナーディさんは思ったとおり、パレスチナ人だった。彼は俺のことをジェントルマンでいい人だという。理由は、アンマンで出発するとき何度も車が故障したので「車を変えろ」と言われると思ったそう。しかし、俺は何も文句も言わず黙っていたからだ。俺はこの運ちゃんの顔を見た瞬間、この人なら大丈夫、俺はついてると思った。車なんか途中でぶっこわれても、この人ならなんとかなると読んだ。その通り。俺は機械より人を信じる。

ナーディさんと話していると、彼が足の裏や腹の傷跡を見せてくれた。イスラエル兵士に拷問された跡だという。このナーディさんの目に初めて怒りの感情を見た。そしたら、英語の話せるパレスチナのおにいちゃんも、俺にも同じ経験があるという。椅子に手足に縛られて、後ろに海老ぞりにする拷問らしい。考えただけでも背筋が寒くなった。

3月22日（金）

私たちJVCはいかなる論理をも乗り起えて、戦争は悪であることを社会へ訴えていかなければならぬ

（注）シェルターの中にいた人数についてはさまざまな説がある。

バグダッドの市場で （1ディナール≒¥400）

	経済制裁前	現在（3/22）
砂糖	50kg-10ディナール	1kg-10ディナール
小麦粉	50kg-4ディナール	50kg-200ディナール
米	50kg-10ディナール	1kg-8ディナール
トマト	1kg-0.5ディナール以下	1kg-3ディナール
肉	1kg-5ディナール以下	1kg-13ディナール
缶コーラ	1本-2ディナール	1本-2.5ディナール

※生活必需品ほど値上がりが激しい。一般の人々の給料は100～150ディナールのままなので、しだいに生活が苦しくなっているようだ。

い。今日、午前中、バグダッドの中心から西へ約25kmの所にあるAmariyaという町へ行った。その町はアメリカ軍の爆撃によって約1500人の人々が殺されたシェルターのある所だ。シェルターはイスラム教のモスクの裏側にあった。もともとは核シェルター用に作られたものだ。私たちが日本で見たテレビゲームのような戦争の下で、やはり焦土と化した地獄絵が展開されていた。

今回のAmariya訪問は、情報省の役人も誰も同行せず、赤新月社とともに宿泊する個人で来たカナダ人医師（アラビア語が話せる）、ガルフピースチームの一員としてきたスコットランドのおばさん、同じくニュージーランドから来た女性と一緒に、私の借りた車で直接行った。シェルターは厚いコンクリートででき、幅30mぐらいの正方形をしている。地上の部分が1階で、地下1階、2階となっている。当時、これらの階に合わせて1500人^{（注）}ぐらいの市民が避難していた。そのうち90%が女性と子供、10%が老人の男性だった。アメリカの2回のロケット弾でシェルターの中は焦土と化し、中は2000度ぐらいになったと思われる。肉と肉がくっついて、誰が誰だかわからないだけではなく、人数さえわからない状態だったそう。500人ぐらいの遺体はすでにタビにふしたそうだが、他の階にいた1000人ぐらいの遺体はまだそのまま残っている。私たちが中へ入ったときも、なんともいえない肉や骨や、何か腐ったような臭いが混ざりあっていた。

アメリカはここが明らかにシェルターだと知っていて、さらに一般市民がいることを知っていて狙ったのではない。隣はモスク、周囲は住宅地で軍事的拠点などはない。

シェルターの周りには、担荷、毛布、子供を包んでいたと思われる布が散らばっていた。私たちがテレビで見たハイテクゲーム戦争の現実、まさに狂気だった。（以下略） 3月25日入手



タイ

クロントイスラムで火災

3000人が家を失う

去る3月2日、タイ・バンコクのクロントイ港にある化学薬品倉庫で爆発が起こり、火災が発生した。火はクロントイ・スラムの中の、倉庫群から壁一つ隔てたコ・ラオ地区に燃え広がり、約500軒が全焼、3,000人が家を失った。新聞では死者は十数名と伝えていたが、行方不明者が多いため実数は100人を越えるのではないと思われる。幸い緊急救援を行う各団体がその日のうちにも活動を始め、3日には食糧・生活用品の配給、トイレの設置、テント建設が行われていた。



燃え続ける薬品倉庫

スラムで働く各NGOは救援委員会を設立し、JVCもこれに加わりました。大量の化学物質の煙が人体に及ぼす害を考慮して今後の住民の健康維持のための募金キャンペーンを開始します。ご支援宜しくお願い申し上げます。
(今泉)

“湾岸戦争をどうとらえるか!”

研究集会開かる

3月16日(土)午後2時～5時50分まで、湾岸戦争についての研究集会が、早稲田奉仕団の奉仕団会館小ホールで開催された。

JVCでは、中東に対する援助方針を“行動提案”として発表した。今回の集会はそれを受けて、行動の必要性を感じている多くの方々とともに中東問

題をより正確に把握する目的で企画された。

雨の降り出すあいにくの天気にも関わらず、会社員、主婦、学生等々、約80人の様々な立場の方々が集まり、会場は盛況であった。

講師陣は、イスラム・中東地域の研究者として黒田寿郎国際大学教授、田村愛理東京国際大学助教授、藤田進東京外国語大学助教授の3名、また実践者として「パレスチナ子供のキャンペーン」田中好子氏と、計4名であった。

湾岸危機をめぐる各国の位置関係、日本と中東の関係、パレスチナ人の生活の現状等々切り口は各々違うが、一貫して感じられたのは、講師の方々の中東への思い入れ、特にその地域に生きる人々の側に立った姿勢であった。

知識として中東問題が整理されたことはもちろん、それ以上に参加者一人一人が自分自身の生き方、関わり方を問われる中身の濃い内容の集会だった。時間の都合上、各講演が約30分と短く、もっと聞きたい、話したいという熱を感じつつ終わりとなった。

この集会をきっかけとして、一人一人何ができるのか。これからが正念場である。

(坂井真紀子)



ソマリアの経験をラオスに—————磯田厚子さん

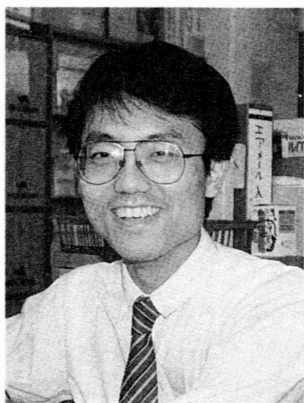
これまで2年余りにわたってソマリアで活動してこられ、昨年12月に帰国された磯田さんが、今度はラオス代表として3月末に現場へ出発します。

ラオスの農村の生活改善普及員養成プロジェクトは、形がかなり定着してきたところですが、これからは普及員が村に帰った後のモデルケース調査を通じて、方法を見直していく段階です。また、村という単位を底辺から活性化させるためには、普及員以外の村人全体も参加できるような、いわば村おこしのプロジェクトも必要であり、磯田さんのソマリアでの活動経験は大いに役立つことでしょう。

地域栄養学を専攻されていたことから、その実践のためにソマリアへ向かわれましたが、現場のプロジェクトの柱は農業だったので、コーディネーターや首都の事務所で代表として頑張ってきた磯田さん。価値感が異なり、国際協力の教師のような国だったというソマリアでの活動から得た最大の収穫は、自分の価値感を押しつけずに現地の人々の積極的な意識を育てることだと気づいたことでした。ソマリアとは人間の気性の大きく異なるラオスで、磯田さん流の「人間の感性につながる協力」が花開くことを期待しています。



JVCの活動を理論化する—————東村康文さん



東村さんは、この3月より東京事務所でJVC研究員として活動しています。初年度の活動というのは、主にタイ農村の農業開発プロジェクトの中から実験結果として出てきた事実を、文書として残していく作業が中心となります。5月にはJVCの主催で「農業と環境に関する国際会議」がタイで開かれるため、報告書作りに余念が無いところです。

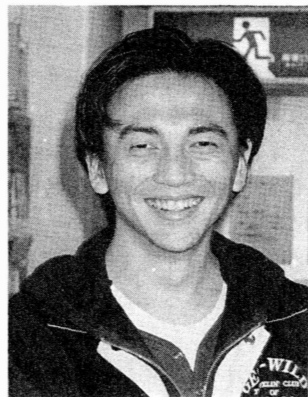
この2年間は、大学院で専門の気候変動の研究をする一方で、JVCの持つ、既成概念とは違う若さの部分に触発されて、主にイベント運営等の国内活動でボランティアとして頑張ってきました。これからは自分の専門を生かして、森林伐採が地球環境に与える影響についての具体的データを作るなど、JVCの活動地での試行錯誤の中からわかった事実を整理して、広くフィードバックさせます。その中にはその土地の文化や社会慣習の事実も入れていきます。こうした文書が積極的に利用されるようになった時、日本のNGOの歴史もまた変わることでしょう。

子供たちのための仕事がしたい—————大槻和弘さん

大槻さんがJVCと関わり始めたのは、2年前。当時、大学4年で就職を考えていた大槻さんは、自分が本当にやりたい仕事は物を売るのではなく、人(特に子供)に対して力になれることだと気づきました。しかし、大学の専攻は法律で、保父や青少年指導員等の資格は取れません。こうして悩んでいた時に、友人からJVCのことを聞き、お金でなく人のレベルでの協力がなされていることや、各自が自分の個性・能力を生かせる集まりだということに共感を覚え、イベントの手伝い等さまざまな活動に関わるようになりました。

今回は4月中旬からタイのパナニコムキャンプへボランティアとして行くことになりました。1年前にベトナムを訪れた体験から、難民を出している国が個人レベルではどうなっているかを理解し、将来的により大きな協力へとつながりたいという希望です。

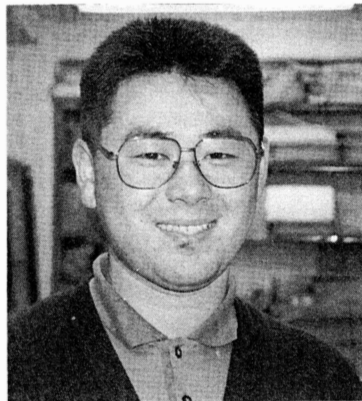
(大満邦彦)



この人に聞く

第三世界で行動するお坊さん

大河内秀人さん



お寺のご住職といえば、袈裟を着てお経を読んで、境内を竹箒で掃除する……、どちらかというと暇な人、というイメージを持つ人が多いかも知れません。大河内秀人さんもまさにそういう人……、というわけではありません。

企画会社を作り、OA機器を操り、車で東奔西走の忙しい合間を縫って、タイの東北地方に出かけて、文化交流を仕掛ける……まったくの現代的青年……というわけでもないのです。

「企画会社といっても、仏教の心とか精神を伝えるイベントをするためのものですし、FAXやパソコンは、お寺が情報化社会のなかで、影響力を強めていくには、やはりメディアについての知識も必要だからです。流行と不易（変わるものと変わらないもの）という言葉がありますが、お寺も、根本の仏様の教えの心というのは変えてはいけませんが、それ以外のところでは時代にあわせて変わっていかなければ、生き延びられないと思うんです」

普段JVCのオフィスで接していると、ごく普通の人ですが一歩突っ込んで話すと、仏教を奉じる心が伝わってきます。

「曾祖父の代から僧籍の家に生まれましたから、葬式仏教でいいのかとか、反感、疑問……、毎日が問題意識の連続でしたよ。大学を卒業するころまで、この世界に入るつもりはありませんでした。

で、方向を変えた理由ですか？

結局は人間に対する興味だと思います。お寺では生き死にという、根本的部分で人間にかかわっていますから……。

卒業後、宗派の学校に2年、それから仏教系の財団に5年いました。財団では青少年活動のバックアップをしていたんですが、全国津々浦々で地道に活動をしている方のお手伝いをしました。それからいろんな理由で、ふたつのお寺の住職を掛け持ちするようになったのですが、このときの経験が、ずいぶん影響を与えていますね」

JVCを支えている組織のひとつに、浄土宗東京教区青年会があります。第三世界の出来事に関心の薄い日本の宗教団体のなか、この東京浄青はここ十年以上、ユニセフやJVCに資金を提供するだけでなく、カンボジアなどに代表団を派遣するなど、活発な活動を続けています。大河内さんはその一員でもあります。

「東京浄青は、物理的に恵まれていましてね。約400のお寺があって、青年といわれる人が約200人、そのうち40～50人活動していますから。でも、もう一歩、踏み込もうとすると、理論と実際、なかなか難しいところがあります。そのへんが私がJVCに来ている理由でもあるんですが。

いま、タイのイサーンと呼ばれる貧しい地域で活動している、教師たちのNGOと手をつなごうとしています。東京浄青の一部の仲間とやっているのですが、現地の

子どもたちに作文や絵を書いてもらい、それを日本の子どもたちの教材にしたいんです。いま、日本の子どもたちは、登校拒否やいじめの問題など、多くの問題を抱えています。その問題を解く鍵が第三世界にあると思うんですよ」

お寺というのは本来、人々を救うNGO的なものだという大河内さん。プロの活動家としてJVCへの注文を聞いてみました。

「さきほど、理論と実際ということをしていましたが、これはどこでも共通する問題なんです。たとえば、お寺においては宗教集団としての建前があり、葬儀など習俗にかかわっている現実があります。第三世界の現場に出ていけば、援助する側の世界的な視野に立つ見方と、援助される側の生活に根ざした本音があります。

その差を越えて、どうやって入りこみ、どう変えていくか、これらのふたつのバランスを取って運営することが、大事だと思うんです。JVCの外国での現場では、このことがよく分かって実行しているはずですが。しかし、日本国内の活動では、自分たちの建前を押し出しすぎているところがあるような気がします。これからの世の中、日本人が変わることが肝心なので、すから、もう少し頑張ってほしいですね」 (A・G)

JVCプロジェクト

1991年2月25日現在

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
東京本部	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報等。 機関誌「トライアル・アンド・エラー」発行。 JVC説明会 毎月第1月曜日 午後6時～8時 毎月第2, 4土曜日 午後2時～4時	全国社会福祉協議会	岩崎駿介（代表） 林 達雄（事務局長） 熊岡路矢, 星野昌子, 前川昌代, 山口誠史, 鈴木由子, 今泉 恵, 富安光子, 富安庸太郎, 柴田久寿子, 柴田久史, 高梨直樹, 岩間邦夫
神奈川県	神奈川県内での渉外、事業計画、資金調達等を行う。 神奈川県及び各市町村の他の民間団体とともに、湾岸戦争被災民への支援募金キャンペーンの企画調整に関っている。 2月17日に行われた“カンボジア支援バザー”は大盛況で約90万円の収益があった。		清水俊弘
	●定住難民プロジェクト 2月9～15日、タイ・スタディーツアー（定住難民の過ごしてきた過程を知る旅）を実施した。クロントイスラム、パナニコムキャンプを訪ねた一行8人は、タイの社会問題を知り、日本定住予定者と交流する中で有意義な体験を共有した。報告会・報告書を準備中。 2月17日、カンボジア支援バザーでカンボジア舞踊、カンボジア料理を披露し、好評を博した。	ジャパン・タイムス、神奈川県福祉部、禅林寺龍華会基金、ケアハウスさくら苑、明るい社会づくり運動神奈川県協議会	小野豪大、他約60人
環境 タイ (チャイアブーン県)	●植林 12カ所で40世帯の農家が、農業、化学肥料を使わない野菜作りを始めた。共同出荷も順調。 ●国際会議の開催 ラオスからの参加者は決定。 ●調査・研究 東南アジアの森林破壊、商品作物栽培の影響などを調査中。	国際開発高等教育機構(FASID) 庭野平和財団、日本住宅協会、YOKE	岩崎美佐子, Komain Soongsumalaya, Kasemsan Sriwatana Chukiat Katchamattya, Prasit Ingo, Chalaem Kaewchoho
エチオピア (東ゴジャム州) ビチェナ	●ビチェナ緊急救援活動 東ゴジャム州青ナイル川沿いの、干ばつ被災地における緊急食糧配給は、1月25日をもって終了した。この食糧配給により、44カ村、7万7,000人の人々が干ばつによる飢えをまぬかれた。この間の受益者はのべ14万人、配給食糧は1,450トンにのぼった。また配給食糧に対するフード・フォー・ワーク（労働などの代価を食糧で渡す）の活動として、道路補修、泉の保護、ため池掘りなどを行った。 現在は今回の緊急援助活動に対する評価レポート作成とともに、栄養失調児に対する保健栄養指導、および衛生的な水の供給のための泉の保護、補修を継続して行っている。 ●農村の総合的復興促進 91年5月の段階で、復興計画再開の地域を決定する。	CRDA, WFP, 犬養道子・みどり一本運動、モラロジー MIRC, 東京グリーン・ワーク、西本願寺、Tree for lifeの会、中部善意銀行、毎日新聞社会文化事業団、JVCカレンダー、メサイアコンサート、エチオピア救援バザー	山田 盛, 江原浩昭, 江原広美, 田尻真由美, 寿賀一仁, Solomon, Shikur, Ali, Tekleyohannes, Yodit

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
ベトナム ホーチミン市 ハイフォン市	●地域総合復興（南部） ひきつづき第8区・ビンチャン郡において、障害をもつ子どもたちの訓練校、エビ冷凍工場で働く子どもたちのための夜間補習・識字学級、病院/産院、職業訓練施設などへの設備改善支援を行っている。ヒーボンスクールにミニバスが到着、フォンフー小中学校はさらに5教室の新・改築を行っている。 ●帰還難民のための職業訓練（北部） 第1回の電気クラス（34名）が4月に8カ月の訓練期間を終える。第1回の洋裁クラス（30名）が12月13日から3カ月の期間で始まった。自動車、バイク修理及び木工のクラスは4月開講をめざして、ワークショップの建設、機材の購入等を進めている。	（南） 庭野平和財団 立正佼成会 （北） UNHCR	熊岡路矢，中野周二， 稲見 圭，稲見由美子， （南） Dinh Khac Mien （Pacom） Cai Bich Thuan （第8区） Le Thanh Hai （住宅土地建設利用局） （北）ハイフォン市 Nguyen Luong Trao Dao Cong Hai Nguyen Van Long
カンボジア プノンペン市 カンボット県 カンダール県	●サンタビエップ技術学校/ワークショップ 車両による国内輸送が復興のために果たす役割を重視し，①ワークショップ（修理工場）の設立 ②自動車の部品等の供給 ③自動車整備士の養成を初期の目標として，1986年にこの事業を開始した。JVCは現地実施機関の運輸省自動車輸送公社と人材面，技術・理論面で協力し，第一期，第二期と訓練を行ってきた。輸送公社には現在100台余りの日本製トラックがありJVCが部品を供給し，現在の自動車整備士が修理，メンテナンスに当たっている。 ●RINE（ライン）プログラム（母子保健活動） 母親教室，危険な妊娠の発見と早期移送，分娩等に携わる助産婦の訓練や医療器具・医薬品の供給などを行う“母性保健”と，小児発育検診や検診で表出された栄養失調児のケアを行う“小児保健”活動を行っている。 ●井戸掘り・給水 1990年から農業省水利局とOXFAM・LWS・JVCとの共同事業になったこの活動は，90年に90本の井戸を掘る計画でスタートした。しかし，内戦や，ソ連・東欧の援助撤退の影響で，現在活動は停止している。 通常の計画に沿った井戸と，国内の避難民キャンプに掘った井戸を合わせ，現在36本が掘られた。	創価学会青年平和会議，モラロジーMIRC，立正佼成会，日産労連，西本願寺善興寺ダーナ基金，高岡寺族青年会，毎日新聞大阪社会事業団，明るい社会づくり運動，神奈川県協議会，浄土宗東京教区青年会，国際保健協力市民の会（SHAR E），四日市商業高校，JVCカレンダー，全日本仏教青年会，カリタス・ジャパン，真如苑，メサイアコンサート	古西 勇，馬 清， 竹井潤子，本橋 栄， 飯島かんな 「現地の実施・調整機関と 主な担当者」 （運輸省） 国際局 Meas Semeth 自動車輸送公社 Thach Cang （保健省・母子保健局） Ann Sarun医師 保健委員会 Nhim Nhem医師 プノンペン郡 保健事務所 Sam Sarung医師 母子保健活動 Tui Kath Mat Samon （農業省 水利局） The Iv Khim 井戸掘り活動 Hok Setha So Sarin
ラオス ヱエンチャン県 ボーリー・カムサイ県 カンムアン県	●生活改善普及員養成プロジェクト 保健衛生，農業，教育など生活全般の改善に携わる女性の生活改善普及員を養成すると同時に，普及員の地域開発活動を支援している。 現在各県で普及員による村人を対象にしたトレーニングが，JVCの建設した3カ所の母子センターを中心に行われている。カンムアン県ではタイのNGOのATAの協力のもと，普及員と村人を対象に井戸掘りトレーニングを1週間にわたって実施した。	UNDP， UNIFEM， 庭野平和財団， NVC，日産労連 ギャラリーイカ ット，聖ヨゼフ 老人ホーム，難 民と地球の緑を 考える会，グル ープ・カンガル ー，メサイアコ ンサート，JOCV， JVCカレンダー	谷山博史，北詰秋乃， 原田恵津子， Thanongsi Solankum Maliphet Sukkasume （ラオス女性同盟） Khamone Phetdao- heuan， Khamphone Saigna- vong

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
タイ バンコク事務所	①総務、会計、資金調達 ②各機関（国連、タイ政府、日本大使館、各国民間援助団体）及び東京事務所、ラオス・カンボジア・ベトナムを含む、各プロジェクトとの連絡調整 ③情報収集、広報活動、④在タイ日本人との連絡調整 2月7日、山形中央ライオンズクラブより1,500ドルの寄付金をいただいた。 2月23日、主婦ボランティアのバザーで12,000パーツの収益があった。これはブリラム農村開発プロジェクトの米銀行に送られる。 ●奨学金プロジェクト 2月8日、JVCのタイスタッフによる奨学金、図書館プロジェクトの評価が行われた。 オンヌットスラム、クロントイスラム、ワットウタイタラム小学校の奨学金児童を訪ねた。 ルアム・ポーカオスラムの立ち退きを契機に、CCSD、スラムスタディーグループ、住宅公団が集まり、立ち退きに直面したスラムにいかに対処すべきかミーティングを重ねている。 ●クロントイ図書館 大人向けの識学教室を行おうと、今年初めから朝のスラムコミュニティ放送で広報したが生徒は集まらなかった。 1月31日より学校に行っていない子供8人（7～11歳）に、タイ語、算数を教え始めた。 シンナー遊びをしている青少年への聞きとり調査は引き続き行っている。	全国社会福祉協議会 メサイアコンサート Tree for life の会、雄勝町町内寺院会、国際ソロプチミスト駿河、からし種モラロジー-MIRC、国際ソロプチミスト山形、山形中央ライオンズクラブ	Pornpimol Chaiboon, Kamol Mingmuang, Manas Torkan Suntaree Lawsuwan, 池島千津子、主婦ボランティア15名 Samruay Jongyorklang
カオイダ (カンボジア 難民キャンプ)	●西崎憲司記念技術学校 山形よりドライビングコース教習のため、2台の自動車到着。タイ政府より寄贈された3台、JVCの1台と合わせ、合計で6台の車で運営し、生徒の収容人数も増やしていく。 かじ屋及び大工コースで作られる農具類を、カオイダ内他団体（YWAM）の農業プログラムに活用させている。 サイト2（ソンサン派避難民キャンプ）のクメール人7名とともに、ブリラムの農村開発プロジェクトを視察した。	UNHCR, SV (Stichting Vluchteling) 山形日産、日産労連	Somyot Rattanatham Sutthi Netprakhon, 井本勝幸、井本美奈、
パナニコム (第三国定住待ち キャンプ)	●日本語学校 2月1日、映画の日に日本の生活を紹介するビデオを紹介した。 2月12～13日、JVC神奈川主催のスタディーツアー9名がキャンプを訪問、13日には生徒たちと交流会を持った。 2月13日、法政大学のスタディーツアー29名が訪問。 2月15～16日、JVCタイスタッフによるパナニコムチームの評価が行われた。	IOM	竹村雅義、熊沢ゆり、 岡村達司、蘭牟田浩美、 Chowarite, Duangprom
ブリラム県	●農村開発 米銀行の準備を進めている。 JVCタイスタッフにより、ブリラム農村開発プロジェクトの評価が行われた。	モラロジー-MIRC, JOFIC, JVC カレンダー	Thongkham Sumruengram,

JVCの活動とその目的に御理解を

▶ **JVC**とは—Japan International Volunteer Center
は1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救済団体
です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっ
かけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動
を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形が
できました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日
本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等
によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、
宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境
にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶ **JVCの会員募集について**— 会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。会員の種別と年会費は以下の通りです。また会費には機関誌の購読料が含まれています。

- 正会員

（一般会員	10,000 円	活動者会員	3,000 円
（団体会員	30,000 円	学生会員	3,000 円

▶機関誌『Trial & Error』のみの購読について

- 毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- 毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法 下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京 5-48365 加入者名-JVC会員係
②T/E：東京 3-54186 加入者名-JVC東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい)

▶みなさまの募金が支えるJVCの活動－救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. アフリカ難民募金 (2月小計 529,028円)
アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. グリーン・フォール・アフリカ募金 (2月小計520,270円)
アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
- C. カンボジア募金 (2月小計 1,393,800円)
カンボジア国内の復興のために使われます。
- D. タイ募金(奨学金・スラム・農村) (2月小計611,000円)
タイの人々の生活向上のために使われます。
- E. ラオス募金 (2月小計 266,243円)
ラオスの生活改善、プログラムに使われます。
- F. ベトナム募金 (2月小計 5,500円)
ベトナム帰還者及び国内復興のプログラムに使われます。
- G. 定住難民募金 (2月小計 2,000円)
定住難民のための日本語教材費と家庭訪問員の交通費に使われます。
- H. 環境募金 (2月小計 35,000円)
環境を守るためのプログラムに使われます。
- I. JVC運営経費募金 (2月小計 39,800円)
現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. 無指定募金 (2月小計 183,092円)
- ▶送金の方法 ー 下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
東京9-27495(募金種目名をご記入下さい)
加入者名 ー JVC東京事務所

編集後記

▶ JVCが発足して今年で11年になる。独身が大半を占めていた事務所にも、近ごろウエディングベルが鳴り響き出した。子供が生まれ、家族で現場に赴任するという者もでてきた。新たな生活基盤の上に活動を展開していくのはいろんな意味で頼もしい。こういう現実の中、スタッフが活動を継続できるように、待遇に関してもいろいろ考えるようになり、育児休暇(父母ともに)、育児手当などいくつか改善されてきた。非常に助かる。しかし、上を見たらきりがない。結局、とれだけあれば暮らしていけるのかという考え方をするのが一番気楽なのかも知れない。(清水)

犬養道子・「みどり一本」募金

東京 0-212497 (2月小計196名1,186,673円)
犬養道子さんの御厚意により、JVCに上記の口座を設け
ました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使
われます。

Trial & Errorは再生紙を使用しています



1991年3月20日発行（毎月20日発行）

編集人 清水俊弘，前川昌代

發行人 林 達雄

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC) 東京事務所
〒113 東京都文京区湯島 3-1-4 会田ビル 5 階
☎03(3834)2388 FAX: 03(0835)0519
Telex: 7604025 JVCHQ UC

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易センタービル9F (財)神奈川県国際交流協会内
☎045(671)7082

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

＊本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。